

みんなが幸せになるために

高松市立国分寺中学校 1年 川原 悠誠 さん

夏僕は、父とマリンライナーに乗り、毎年岡山大学に行く。ぼくは生まれつき目が悪く「眼振」という病気をもっている。「まあ、いでんしだからしかたないか。」と僕は思っている。目が悪いことは僕の特徴なんだから、その特徴とつきあおうと思っている。ぼくは「眼振」のせいで、とんでくるボールとの感覚や距離が分かりにくい。だから、だいたいの球技は苦手だ。母は「父さんに似てどんくさいだけや。」とって笑う。その通りだなと僕も思った。僕は中学生になって、「卓球部」に入部した。先輩たちはとても強くて、この間行われた市の大会では、団体戦で優勝した。また一年生にも強い人がいて、「みんなうまいんや。」と母に言うと、母は「始めたばかりやけんそりゃへたやわ、どんくさいけん当たらんのや。よく練習しな。」と言う。父は「車の免許とれんかったら生活に困るから少しでも視力を上げるためにトレーニングしろ。」と言う。一方母は「都会に住んだら車やいらんから。都会に行くためにしっかり勉強しろ。」と言う。努力でどうにもならないことは、スッと忘れて、努力でどうにかなることをがんばれという、前向きな考え方に、僕は、スッキリした気分になる。しかし、僕は席がえのときにいつも思う。「席がえってする意味があるのかな。」とか、「一番前の席ばかりじゃあきるな。」とか。でも一番前の席でないと、黒板の文字が見えないのだからしょうがないなとも思う。現実からはにげられない。ちょっと困ることもあるけれど、笑いとはせるはんい内だ。

でも笑いとはせないことも世の中にはある。僕は、この間岡大から帰る途中信号を渡るときに「パッポパッポ」という

音が聞えないことに気がついた。行く時には、確かに鳴っていたのに。家に帰って調べてみると、夜八時から朝七時の間は鳴らないらしい。夜は音がうるさくて寝られないという人がいるので夜は音を止めるそう。でも、あの音が鳴っていなかったら、目の不自由な人は外を出歩けなくなるじゃないかと僕は思った。実際そのせいで、事故にあう視覚障害者もいるそう。しかも、夜八時から朝七時の間というのはかなり長い。だからといって、僕も夜あんなうるさい音をたてられては困る。皆が安全で、快適に過ごすのは、難しいことだなと思った。

そのヒントは、母のある行動にあった。母は点訳絵本を作っている。点訳絵本とは、文章に点字がついているだけでなく、絵にも、ビニールシートがはられている。点訳絵本を使えば、目が見える子供と、目が見えないお母さんがいたとしても、親子二人で絵本を楽しむことができるのだ。一冊作るのに半年かかるらしいが、このように目が見える人も、目が見えない人も、一緒に幸せになれる世の中にするために僕に何ができるか考えたい。